

---

Rising

勝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Rising

### 【Nコード】

N8603Q

### 【作者名】

勝

### 【あらすじ】

鄭和<sup>ていわ</sup>9年。西暦2036年。海<sup>うみ</sup>にて未確認物体の確認。同日いきなり呼び出される少年 鳥海<sup>とりみ</sup> 恭介<sup>きょうすけ</sup>とは？

## もう一つの支配者

時にして鄭和<sup>ていわ</sup>9年 西暦2036年

何かから逃げるように開きっぱなしになった車の数々。

活気のまったくなく完全に停止した新幹線。

そして、海に沈みきった無数のビルの間を悠々と泳ぐ巨大な影。

その影を待っていたかのように車道に並ぶ戦車や兵器の軍勢。

「発射！！」

海で泳ぐその巨大な影をめぐりて拡張期を合図に兵器の軍勢が一斉に砲撃を始めた。

見事命中と言ったところだがなぜか巨大な影にはまったく通用しなかった。

確かにあたってはいるはずなのだが・・・

#

「平成以来だな？」

まゆをひそめ、一人の老人がサングラスの男に話しかけた。

平成は2020年を迎えて終えた。

しかし、これには理由があった。

#

平成最後の年 西暦2020年

大質量隕石の落下によって地球は約3分の1の土地、人を失った。

俗に言う「2シヨット事件」

これを境に地球の様々なもの変わっていった。

#

「あっちゃ・・・道に迷った。このハード古いのよねえ・・・」

カーナビと睨めっこ状態で車は愚か人影一つとない車道の真ん中を一台の新車が通る。

カーナビの画面には今通っている道の姿はなく、ただただ山の中を走り続けていた。

助手席にはなにやら極秘の書類が散らばっていた。

そして書類の一番上には一枚の写真がクリップでとめられていた。

<トリミ キヨウスケ>

「はぁ・・・まいったなあ・・・」

情けないため息を出して女 萩原 千里は車を走らせた。

#

「現在この回線は非常時警報宣言発令により停止しております・・・」

「

「はぁ・・・」

こちら一枚の写真をちらつかせながら情けないため息をついていた。

バラバラ・・・

戦闘及び偵察用に特化された戦闘機が両翼につけたプロペラを残像が残るぐらいに回していた。

それに誘導されるようになってくる巨大な影。

#

「使類しゆいか・・・」

「ああ・・・ちよつと席を空ける。後は任せた」

サングラスの男はエレベーターに消えていった。

「予備を見に行くのか？」

サングラスの男が消えた今老人はそつとつぶやいた。

#

ドスンドスン・・・

カタカタとしまりきった商店街のシャッターが音を立ててゆれた。

そして恭介の前には巨大な影しゆいが立っていた。

国連軍自慢の軍勢のほぼ壊滅状態と化していた。

キキーン!!!

そこに現れたのは青い新車。

「私は萩原 千里よ・・・のつて」

写真に書かれたく萩原 千里>の文字を見てるうちに千里は恭介を

自慢の新車の助手席におしこんだ。

## 終始、停止した世界（前書き）

二話です。飽きて書かなくなるうちに書きたいとおもいます。

## 終始、停止した世界

キラリ

荒れた土地の中一瞬だが小さな光を放った。

双眼鏡を覗き込んで千里は正直あせっていた。

「・・・B兵器を使つきか？」

「B・・・兵器？」

B兵器とはBAIO兵器のことですつまりの生物兵器と言ったところだ。

ピカ・・・

先ほどの光とは比にならないほどの巨大な光と煙の柱が立っていた。

#

数十分後 極秘組織 機関内部

20という白い文字がデカデカと書き込まれた壁を背後に

「ここ通りましたよ？」

学生服を身にまとった少年は呟いた。

ガーン

<か・・・可愛い顔して悪魔か！！>

完全に情けない顔をして千里はその場にひざまついた。

「あー！！！！。ここ・・・ここよ！！！！」

パーツと顔が明るくなり、恭介の背中をバンバンとたたたく始末

「いた！？・・・痛いです千里さん」

<よつぽど嬉しいんだな？>

しかし、楽しげな空気はつかの間として終わっていた。

バチン

いきなり真っ暗になる部屋。

唯一光っているのは電子ドアの<LOCK>という文字だけ

「あれ？真っ暗ですよ？」

勿論初めてやってきた恭介にとって”真っ暗”とは一番の不安の対

象へと塗り替えられた。

バチン

再び電気の音がしたときには恭介の前には一機のロボットらしきものが・・

同時に彼の脳裏にはもはや不安よりも恐怖が植えつけられていた。

「ライジング ユニット1よ？」

向こう側からやってきたのは白衣を着ていかにも研究者と言うオーラを出している 蝦夷 恵子。

#

「ユニット1のデータを鳥海 恭介に書き換え終了しました。」

「第六技術班は急いで第二発令所に着てくれ」

#

「まさか・・これを着ると？」

「そっだ・・・」

防弾ガラスの前に一人の影が現れた。

そして恭介はその声の持ち主を確信した顔で見上げた。

<お父さん・・・>

彼にとって父とは一つの恐怖の対象でもあった。

3年ぶりの再会とあって、彼の恐怖はまさに絶頂と化していた。

ドクン・ドクン

心臓の音が全身に響く。

「3年ぶりだな？」

「そ・・そんな」

父 鳥海 信二の「3年ぶりだな」という言葉はまったく持つて無視し、自分がこのライジングと呼ばれるスーツを着て化け物しるいと闘うということが怖かった。

#

ライジング ユニット1 出撃

ライジングは人と同じ背丈で作られている。

スーツというよりかは棺に入る、という感覚のほうが正しいと思わ

れる。

腰には刀が一本だけと勝てるという見込みは限りなく0に近いと恭介は思い込んでいた。

だが、ライジングは身体能力を異常に上げた。

理由はひとつ走りながら障害物をよけようと軽くとんだつもりが家をも飛び越していたのだ。

足は格段に速くなり身体能力の上がっていた。

一気に使類の真下までやってきたところでいきなりだった。

ズガン・

何が起こったかはわからないが頭に激痛が走った。

「人体及び精神に異常発生」

「神経をカットして」

「了解。一部神経カット」

「ダメです。カット信号傍受されました」

「スーツの緊急停止」

「ダメです。同じく信号傍受」

「ライジングの中枢部侵食が始まりました」

「ソリタリー壁の規模縮小」

「ライジング ユニット1 完全停止しました。」

「こちらから恭介君の生死は判定できません」

「回収班・・・出動」

「ユニット1・・・再起動です」

「え？」

「まさか・・・暴走？」

#

「ここは？」

## 終始、停止した世界（後書き）

こんにちは〜勝ですう（・・・）

最近暇を感じまして今回の作品を出させていたいただきました。

正直よく似た作品を”アニメ”で見たまたは知ってる等はあるかも  
知れません。（自覚あり）

ですが、一応「科学と神話?の連携」を主体としますので〜  
ってネタばれ!?!と思われる方いらっしゃいますか・・・

今はまだ科学オンリーですのでねえ

では〜また3話であとがきを書く気になりましたらその時に〜



を防御、生命維持を施します」

「つまり・・・回収を試してみなければ・・・」

「そうね」

「恵子・・・恭介君はどうなるの？」

「基本は大丈夫よ・・・ソリタリー壁が彼を守ってる。」

「恵子博士・・・起動してます・・・ユニット1が」

「まさか・・・生きてるの？」

「いえ恭介君は現在沈黙です」

「気絶か最悪は意識不明ですね」

《ぐおおおおおおおおおおおおおおおおおお》

ユニット1は大きく口を開け、野太い声を上げた。

”非常事態発生” 繰り返し返します” 非常事態発生

「まさか・・・暴走？」

《ぐおん》

<ライジングとはそもそも何なの？>

千里にはライジングについて詳しい説明が特に無く、不可解な物を和が支柱としていた。

ユニット1は先ほどよりもスピードを格段にあげ使類の心臓たましいのけり上げた。

そして、今度は残像が残る早さで光線を撃つ使類の壁？らしきもので防ぐ。

ピキユウイ

独特の音を立てて使類もライジング同様ソリタリー壁を出現させる。だが、ズバリと使類のソリタリー壁をまっぴたつの切り込んだ。

その強さは莫大でなんと映像化したソリタリー壁に彼らの血がつくほど強力だった。

スーツともはや無人状態のライジングは腰の刀を抜き出した。

”音波ブレード”と称される特殊な刀。

一般兵器は彼らにとって確証とはならないが栄養に近いという説もあるらしい

つまり一般兵器では彼らは増幅してしまうのだ。

だがこのブレードは様々なものに変化、具現化する彼らの肉体を斬ることが可能な唯一の対抗武器とも言えるだろう。

ズバ、ズバ、ズバ

先刻のソリタリー壁の一撃によってひるんだ使類はなすがままに肉体を切り込まれて行った。

「うおえ・・・」

「これがライジングの姿・・・」

「これが人類の希望？」

「そうよ・・・」

## 暴走の果てに、（後書き）

皆さんこんにちは

今回は手抜き率がハンパないはずですが

恐らく作者本人としても多くの謎を残すであろう甘割れる今作品は

・

ということでも個人的に説明したいことがあります。

”ライジングと中身の人間について”

なぜ今回の様に頭をぶち抜かれたにも関わらず鳥海は平気であるの  
だろうか・・・

これはスーツの絵はありませんが感的には某映画G.I.ジョーのあ  
のスーツをイメージしてください。あれだけ分厚いスーツなんです  
がライジングは層できています。強化骨格の下にはなんと常備張  
り続けるソリタリー壁があります。

つまり例え外のソリタリー壁が無くなっても中の人間は自動的に守  
られることになります。

## 狂いの中、

16年前の事件を一部抜粋

地球が原型をとどめられなくなった16年前の事故。

地球は3分の1を崩壊しており、原因は未だなぞとされる。

それから16年後鄭和9年にて謎の生命体を発見、殲滅。

以後これらの存在を使類と呼称する。

#

1年前 極秘プロジェクト始動

ライジング建設に関わる極秘資料 一部抜粋

ライジングと呼ばれるのは誰もが持つ孤独心を物理的に空間に具現化することが可能

特殊な武器として挙げられる高音波ブレード。

実際には音波ではなく一切の謎となる。

#

数が月前 ライジング ユニサード 起動実験

失敗

再度実験 ビデオカメラからの撮影



「ユニサード再起動」  
「ダメか・・・」

#

実験フリーク

失敗

原因：蝦夷 恵子研究管理官の説明

「今回の実験の失敗要因は被疑者の緊張から来ています」

「緊張のあまりユニサードの退化ラインを超えたため高電圧電源  
第一ボルトが進化を  
始めたと推測できません」

「以上より被験者の心の準備次第次の実験を開始します」

#

ライジング建設に関する極秘資料 一部抜粋

ライジングには二つの種類がある。

1 アバターモード

2 モード04

アバターモード：無人操作

モード04：有人操作

モード04は人類のモチベーションでライジングの調整角度も変わるとする。

狂いの中、  
(後書き)

今回はもっとも手抜きかな???

## 再襲来、狂人発火

グツグツと荷たるカレー

カパツと炊飯器を快音を立てながらエプロンをつけた少年はご飯をよそう。

先日使類と戦闘し、進化の予兆の被害者となり、暫く病院生活をしていたが

昨日晴れて退院したばかりである。

「良かったわね？早く退院できて〜」

千里は椅子に体育座りを決めて片手にはなにやら資料が持たれていた。

「はい。ところでまたあれが出たんですよね？」

あれとはつまり使類である。

そんな中普通の生活を送っているように見えるのはカレーと炊飯器ぐらいであり、

ほかにはライジングの整備を行うクルーの人たちだけであった。

「このカレー、誰が作ったの？」

そう現れたのは蝦夷研究管理官。

「えっと、千里さんなのですが、食べます？」

すると、どこか表情を硬くして蝦夷は言った。

「ち・千里の？じゃ・じゃあいいや」

「??？」

少年は一口カレーライスを口に運んだ。

「まずっ！！！！！！！！」

#

数時間前 東海地方 場所三重県北東部

機関の本部は少し慌しかった。

本部の巨大なモニターには地理的な地図が広がっており山々が広大に現されていた。

緊急事態発生 繰り返す 緊急事態発生

「主電源切り替え。モニターします」

先刻の地図は消え、モニターには移動物体が表示された。

「今回はわずか1ヶ月で狂の使い「狂類」か・・・」

「はい、そうですねえ」

「いける？」

「はい。」

キョウスケはコクリとうなずきライジングのケージに向かった。

## 二戦突破

「第一ボルト ロック完了です」

「了解。現段階ユニット1は沈黙です」

「同じく。退化ライン境界線はワースト200です」

「発進」

ケージは開けられユニット1は爽快に出撃した。

そこには蛇のような使類が直傍にいた。

「うおお？」

直前に迫った使類を見て、ユニット1は後ずさりを始めた。

ズッバーン

ビルのひとつが円盤のようなもので破壊された。

ビルはそのまま倒壊。

「さてと・・・」

ある程度距離を離れたところでキョウスケは高音波ブレードを腰の鞘から抜き出した。

太陽の日が当たり、ブレードは光を放った。

円盤の次の標的はユニット1らしく使類は円盤を尻尾の辺りから放った。

勿論使類同様孤独心を具現化されることの可能なライジングにとつて防ぐのはお茶の子さいさい。

ソリタリー壁は円盤を打ち崩した。

「今度はこつちから！！」

ユニット1のブレードは大きな弧を描き使類の足元を縦に切りつけた。

《ぐおおおおおお！！》

使類は苦しそくに大きな声を上げた。

しかし、次の瞬間キラリと目の色を変えた。

恐る恐るキョウスケもそちらに視線を送った。



## 施設騒然、二人

初陣に二戦目のたった一人で突破してきたキョウスケの元にもう一人のパートナー

がつけられることになった。

「初めまして・・・飯島 ユウです」

すらつと肌白い少女・・・

「!？」

しかし、キョウスケは思い出す。

数日前に闘ったばかりの狂の使いとの戦闘の際、その激戦を見守っていた少女ではないか。

だが、声が幾分か低い・・・

<男?>

女にはあまりにも低い声はその美貌を台無しにしている。

「彼は現在封印されているユニサードの被験者よ」

千里が彼と言ったあたりからユウと言う子は男のようだ。

ユニサード・・・

キョウスケには聞きなれない言葉だった。

だが、ライジングシリーズであるということが少々確認できた。

#

ライジングに関する極秘資料 一部抜粋

ライジングには現在仮設状態であるユニット1とユニサードの二機が存在している。

どちらも仮設ではあるがユニット1に関しては二体の使類を殲滅しているため

実戦にも使えるとされる。

ユニサードに関する資料 一部抜粋

現在ユニサードは封印状態にある。

実戦経験は0となる。

現在ユニサードは退化ラインを正常値ワースト400に下げられず  
ワースト269のため  
状況を見てもう一度実験フリークを起こす予定。

#

実験フリーク

「既に12回も失敗してるわ・・・今度のユウの精神には最善の注  
意を持って」

白衣を着て蝦夷研究管理官は実験を開始している。

実験フリーク：ナンバー13

「外見、高層盤、全ナンバー異常なし」

「了解。高圧電源起動確認」

「内部起動確認」

「S-4緊急発令」

今回はキヨウスケもケージから見守っていた。

<既に12回も失敗してるのか・・・>

不安げな顔をしているも必死に応援もしていた。

「退化ラインワースト300に上昇」

「大丈夫？ユウ」

「はい・・・」

巨大モニターに映る夕の顔には不安はなかった。

「アバターモード切替。モード04」

「TS-W解禁を一応準備しといて・・・」

退化ラインを指すグラフは依然300のままステージは3に移行す  
る。

<さて、ここからが問題か・・・>

ステージ3は最も被験者に負荷がかかる。

今までの失敗もここだった。

全員が不安な顔を出す。

「再起動まで3、2、・・・緊急事態発生」

騒然となる実験施設。

「彼が??」

「いえ、違います・・・使類です」

「使類？」

「アバターモードに切り替え」

ピタンッ

そこには四足の中型の使類がいた。

「ユニサードの再起動を確認」

「使類を肉眼で確認・・・」

いつの間にか千里とキョウスケは消えていた。

「ユニット1出撃!!」

施設の崩壊などおかまいなしにユニット1は実験場に突き進んだ。

確かにユニサードは再起動したものの高音波ブレードもない。

その上、負荷がかかりきつたユウはまだソリタリー壁を出現できない。

それもあってキョウスケは出撃した。

使類の腕はもうユニサードを捉えようとしていた。

ガシリ

次の瞬間にはもう完全にユニサードを捕まえている使類。

しかし、それもつかの間使類独特の血を噴出して使類はその場に倒れこんだ。

「はあはあ・・・ユウ君大丈夫？」

割と社交的なのかキョウスケはもうユウのことそう呼んでいた。

「ああ・・・トドメは僕がやるよ・・・」

ガシリ

今度は逆に使類の首を握り締める

グツグツ

ボキリと鈍い音を立てながら使類はその場に横たわった。

## 起動確認、出撃

「使類の侵入とはとういうことだ？信二・・・」

「施設の倒壊・・・」

「だが、ユニサードに関しては敬意に称するよ」

「まあ身を滅ぼさずに・・・」

#

キョウスケ、ユウはそれぞれ本部の巨大モニターを操る一人の研究員の下でしばし休息をとっていた。

「へえじゃあ君はすぐに緊張する癖があるのか・・・」

キョウスケにとっては彼が 機関で初めての友達となる。

それもあり、 によく居座るようになってくれた。

周りの人間もそれを認めているのかその行為に文句をつけるものなどいない。

「緊急事態発生です!!!」

巨大モニターを操る村川と言う研究員は叫んだ。

バタバタとキョウスケ、ユウはライジングのケージに向かう。

「いよいよユウの初陣ね・・・」

「そうですね・・・初めての使類はユニット1がある程度倒しちゃいましたからね」

「両機全ナンバー開放」

「ライジングユニット1・ユニサード・・・発進!!!」

二機は高々と飛びながら綺麗に地上に着陸する。

「先手必勝!!!僕からだユウ君」

シユウウウと綺麗な金属音をたてながらユニット1の刀はその姿を露わにする。

「はああああ!!!!!!」

スバツスバツ

巨人のような使類の足から胴体を斬りつける。

しかし、使類のターゲットは先にユニサードなのか腕を大きく振り  
風を力に変え

ユニサードを真つ二つにする。

「きゃあああ!!」

ユニサードからは大きな悲鳴が上がる。

「アバターモード緊急切り替え」

「信号傍受・・・壁です」

「!?!キョウスケ君?」

「あがつ・・・ごほ!!」

いつの間にか僕の体には使類の腕が刺さっていた。

「両機沈黙」

## 破壊、強敵の胸の内

「やっと二人とも帰還ですか・・・」

「ええ・・・使類の目の前ですもん。そりゃあ回収班もてまどうでしようね」

数時間前にユニット1ユニサード両機は使類の攻撃の餌食となり結果停止をしてしまったばかりであった。

キョウスケの怪我はたいしたこともなく、既に退院はしていたが問題はユウのほうだった。

今回の使類は巨人である上、腕のリーチには悩ませる攻撃である。リーチの届く範囲から長距離の高音波銃が必要とされる。

「二機の修復にはどれくらいかかるの？」

「少なくとも29時間は・・・」

悩ましい結果である。

#

今回の失敗について

失敗要因 萩原実戦管理企画部長の説明

「今回に関しては油断が一番大きいとされます」

「実際ユニサードの機体攻撃を見かねていた際にユニット1への直接攻撃」

「使類には知恵が徐々に蓄えられていると考えられます」

#

「使類の進行を続けています。」

ズシンズシン・・・

二の使い鏡士きようしと俗に言われる今回の使類。

巨大な身長に灰色の体、腕は現在では体型とあつた大きさをしているが戦闘機が邪魔をすると直後に

腕をゴムのように伸ばし、戦闘機を貫通させるような一撃を繰り出

す。  
それにつけ肉体も使類付近の空間には相変わらず孤独心がびっしりと張り込まれている。

#

作戦管理室 研究員 萩原、蝦夷、右京プログラマー

「さて、今回の作戦は・・・」

硬い表情は全員に表れていた。

実戦にてはじめての敗退。

その上使類も人類同様に知恵をつけると来た。

昨日の常識はもはや一瞬にして一つの経験として捕らえているようだ。

「ユニット1は攻撃に回すか・・・ユニサードには攻撃は荷が重い・・・」

今回はブレード関係での攻撃は不可能と見ている面々。

実際ブレードでは敗退、もう一度挑めばよいと考えられる。

が、ソリタリー壁の範囲から見て先の戦いでユニット1の攻撃はたまたまと見られる。

以上のことより銃を使うしかほかないようだった。

#

「出撃！！」

結局2日あたり立ち出撃許可が出たのはユニット1だけだった。

その手には拳銃らしきものが握られていた。

この拳銃は中に高音波の矢が入った特注品。

弾丸を高音波ブレードと同じ性質にするのは現状から無理とされていた。

シユンシユン

その特殊な拳銃の矢は瞬時によけられた。

どうやら巨体な体のわりによけるのもうまいようだ。

「ちい・・・」

舌打ちをつきながらも次の弾をリロードし始めた。

カチカチ

リロードが終わった頃ズシリといきなり首が痛くなった。

「あが・・・」

ズリズリと削られる体力・・・

<しめた・・・>

ドスリ

《くおおおおおおおお》

腕には一本の矢が・・・

刺さった瞬間には既に使類は腕を引き離していた。

しかし、キョウスケはそれに続け、2、3本と次々に矢を突き立てた。

《くおお・・・お・・・おお・・・》

巨人の顔には白目のようになり、手を宙ぶらりんに後ろに倒れこんだ。

「殲滅か？」

「いや・・・」

ガシリ

刹那・・・今度は全身に激痛が走った。

「そんな・・・」

《くおおおお！！！！！！！！！！》

使類の腕には無数の矢が・・・

「ユウ？」

ユニサードとユウの回復は早かったのか・・・

スルスルと大きな腕は抜け、キョウスケは地に着陸した。

「あ・・・ありがとうユウ」

「いいんだよ・・・キョウスケ」

#

千里宅

「う・・・カレー」

キョウスケは生唾をグツと飲み込んだ。



父親はどうかあれ、母親は物心ついた頃にはいなかったし・・・でも、  
必要とされているのなら

「・・・」

「闘つてることが・・・」



#

「いやな親父！！！！！！」

そう叫びながら千里はゲシゲシと恵子をけり倒す。

しかし、恵子は平然とした顔で一言呟いた。

「大人げない人」

「悪魔！」

#

「ユウ・・・行くよ」

「行かない」

「行くの」

「行かない」

「行くの」

「行かないんだってばー！！！」

「あ！やめ！ヤーマー」

ズルズルとユウを引きずるキョウスケ。

その表情は不安と期待の入り交じった顔だった。

「Hi! Mari Mikaduki」

「Oh! Tisato」

そこにはスラツと白い肌の色をした一人の少女がどこかの学校の制服を着ていた。

<英語??>

「気にするな英語は話せるが嫌みは日本語でしか言わない」

「こんにちは、ユウ」

「よ・・・よう」

<本当に苦手なんだ・・・>

ユウへの嫌がらせはこの辺りと言うように今度はキョウスケの方へ向いた。

「こんにちは。キミがキョウスケ君？よろしく！」

「よろしく！マリアさん」

「いよいよマリで」

どこか気に入ったのかニッコリと微笑みながら去って行った。

「良かったな」

「!？」

## 「マリ初陣、実用型機体ユニル」

「へえじゃあユニルはユニット1やユニサードと違って実用に特化されたものなんですか」

空母にある隊員達専用の食堂であるが今はまだ昼食に早いためいるのはユウとキヨウスケ

付け加えてマリとなるわけだ。

<なぐにが「へえ」だ!!>

どこか嫉妬心を含むことを考えながらちらちらとマリを睨みつけるユウ。

「ねえキヨウスケ君・・・席替えようよ・・・変態が見てくる。」  
それをつき返すようにマリは上から視線にユウ見る。

「ごめん・・・僕トイレ」  
その状況を見て、キヨウスケの選択は一つ、逃げるだった。

「・・・逃げる子は嫌いだね」

それを見て、マリは彼への情けなさを感じたようだが今はそれよりもユウのほづが気になるようだ。

しかし再び前を向き直り、少し冷めた口調で昔話を淡々と言い始めた。

「5年ぶりね・・・」

それを見てユウも同じように前を向き同じように昔話に付き合った。

「ああ・・・あの頃はお互い恋人だからな・・・」

「ところで・・・キヨウスケはどうだ？」

昔話は一転し、二人でキヨウスケの感想をいきなり話し始めた。だが、マリはそれをどうこう思ったようではなく質問に答えた。

「正直・・・冷めた子ね・・・末路は」

「俺と同じってわけか」

「あんたは？」

【緊急事態発令繰り返す緊急事態発令】



しかし、海の上と言うこともあり、依然相手の正体すら見受けられない。

「作戦は？」

「ない」

はあとため息をつきながら絶望の節にたたされるユウ。

しかし、それを余所に別の空母には既に巨大生物が乗っかっている。

ギョルルル・ドス

「きゃあああ！！」

「マリ」

いつの間にか使類の針らしきものが突き刺さっているユニル。

高音波ナイフを投げようと振りかぶるがそれを察知したかのようにザボンと再び海底にもぐる

使類。

しかし、胸を押さえるユニルに使類は容赦無く襲い掛かる。

アングリと大きな口をあけて小さなユニルを啜える。

「きゃあああ！！」

大きな悲鳴を上げるマリを助けるべくユウはナイフを投げつける。

が、また海底に潜り込む。

「ちい・・・」

「うわあああ！！海は無理！動けない」

「あり？いつの間にか・・・電池プラグだ！！これって後40秒しか持たない系？」

いまさらの絶体絶命にもはやまじめと言う言葉は消えていた。

グングン空母から引き離されるユニル

しかし、陸上装備のためか刻一刻と電池プラグは消費していく。

もはや、なすすべもなし・・・と思われた次の瞬間。

いきなり鼓動が早まる。

自分のものも早くなるがライジングの機体自体からも鼓動が聞こえる。

ドクン・・・ドクン・・・ドッ・・・ドッ・・・ドッ

「はああああ！！！！」

<まさか・・・進化？>

無線越しに進化を察知したのかユニサードはいきなり予備パーツの保管室に向かう。

「あつた！！」

#

ユウに何かプランがあるということも知らず、ユニルはグツグツグと小さいな体の筈だが大きな使類の口を無理にあける。ザブン・・・

後ろには海底用に適した装備のユニサード。

「投げて！！」

もはや電池プラグは10秒とない。

「進化はいいのか？」

進化の状況を把握しつつもユウは大きく振りかぶりナイフを投げた。何か青いものはじける。ドバーツと使類はいきなり青い液体に化し、跡形もなく消え去っていた。

#

一方トイレ

「・・・泣きたい」

#

司令室

「エネルギーが消えました・・・」

「しかし、近くに二機のライジングが・・・」

「え？」

「これがライジングです」

自分が殲滅したわけでもないが自慢空母の艦長に威張る千里。

## 人類、秘蔵の計画

鄭和9年6月 3日 火星

「肝心なときは邪魔者か・・・」

スペースシャトルの丸い小窓から除く鳥海 信二、付き添いの要望。

人類の進歩は月に留まらず火星、金星へと進出して行った。彼等がいるのは R i s i n g Y S と呼ばれる米国製の特殊ライジングの建設見学。

地球での製造は行わず火星にての製造とあつてどこかキナ臭い・・・  
「ふむ・・・だが、かまうまい。我々には白血があれば良い」

#

「住民は？」

「退避完了との報告です」

「使類のソリタリー壁反応は？」

「不明です」

「・・・厄介ね」

「ユニルの出撃がアメリカ国連の要請です」

「ユニット1とユニサードは・・・」

「いらないうつてことですね。実際ユニルは実用型ですからね」

#

「え！？俺達はいいんですか」

第一リードケージ ユニル専用

キョウスケは少し安心した様子を見せるがどこか悔しい様子でユウは千里を見つめた。

「・・・そうね」

それを曇った顔で返し続ける千里。

それをどこか見下すように見るマリ。

#

「出撃用意」

「了解。リンク4TH電腦第一コースクリア」

「了解全ナンバー異常なし」

「Year。リンクスタート」

「高電圧コンセル起動レーダー確認」

「コンバットウオマン目視確認の報告入りました」

「内部、内臓起動確認」

「リンク4TH軌道に乗りました」

「了解。ナンバーロック1解除」

「続いて2、3、4、5、6全てのナンバーロック解除。確認」

「運用力タパルト延長」

「発射!!!!!!」

#

侮辱

衝撃

殺戮

衝撃

破壊

異変

・・・暴走・・・

異変

沈黙

沈黙

沈黙

沈黙沈黙沈黙沈黙

#

「ユニル・・・停止」

緊張

それが原因

三日月 マリ

使類の寄生確認

「本体は・・・寄生虫?!」

翼がある。

それは希望？

違う・・・

明日がある。

それは希望？

違う・・・

現陶治圏内 陶治中学校

体育館。吹奏楽部の練習 開始5秒前

4 / 3 / 2 / 1 開始

さかのぼる4分前。

「おはよう。鳥海君。今日も練習早いね」

さかのぼる3分前。

「お・・・おはようユウさん」

(無視、沈黙)

未来に進む+1分

「遅いよう・・・」

「ごめんごめんマリちゃん」

トロンボーン。

トランペット。

フルート。

ホルン。

#

「今日も終わったー」

「そういえば鳥海・・・お前転校するんだろ？」

「う・・・うん」

#

砂場と合同した謎の体育館。

君は鄭和の時代で何を見つけた

何も・・・

そう。

じゃあ君にとっては何？

怖いもの

そう。

じゃあライジングは？

不可解

何が？

・・・

沈黙じゃあ分からないよ。

・・・

そう。

じゃあ日常を謳歌してる気分はどうだい？

反吐が出る

どうして？

答えるべき？

#

マリちゃんは死んだんだ！！！！！！

死んでないわ

千里さんは何を言ってるんだよ？

いいえ、あなたが間違っている。

違う。死んだんだ。

#

孤独身は何を産んだ？

恐怖

信二さんへの？

そうさ・・・信二は俺の親じゃない。

どうして？

違うもんは違うんだ！！

そう・・・

でもさ、本当の親だったら？

違う！！！！

#

「さて・・・持ってきたんだな？」

手錠に頑丈そうなケース。

大きさは相当大きい。

ガチャリ・・・

中を開けるとケースとは対照的な大きさのショーケース。

中には蜘蛛の足のような形をしたエンブレム？

「ええ・・・人類還元のときへの箱舟。ノアです。」

「命運の類との融合。代償として類の妨げ。」

「影たる時は近い」

「黒血の産声はとうとう上げられる」

「36年前に遂げられなかった人類の未来はこれによって」

「「「「「「完遂する」「」「」「」

#

希望の使類と絶望の人類。

これらが混ざり合った時

翼をはためかせ大空へと羽ばたく

命運の類となる

新たなるステージへと

#

僕が決めるの？

そうだよ・・・

人々は命運の類って呼ぶんだ  
命運の類？

そう

全てのものは君のものさ

でも、鍵があるんだ。

鍵？

そう・・・ノアだよ

ノア？

#

明治 大正 昭和 平成 鄭和

鄭和10年。

人類は命運の類を目の当たりにする。

影たる時は近い。

それは紛れもない事実。

人々は駒。

遊びの対象。

止まらない、加速を続けるゲーム

機関は血の海。

それも紛れもない事実。

あまりにも大きな事実。

火星よりの使者。

ライジングとは何？

一種の使類。

人々は何をしよう？

それは君の知る事実ではない。

「死んじゃえ」

え？

刹那。

言葉の矢は降り注ぐ。

グサリ、グサリグサリグサリ。

事実を知るためにある。

肯定？否定？

否定

ここにいたい

肯定？否定？

否定

君は誰？

鳥海キヨウスケ

誰？

・・・ライジングユニット1のモビルマン。

ライジング？

そう

人類にある最後の切り札。

じゃあそれを着る君ってすごいね・・・

そうかな？

うん

でもさ・・・

君っていつもおかしいよね？頭

え？

なんでさ！

そうじゃん

そんなわけないよ

本当に？



## 孤独の心

それは時には自分を守り、時には人を傷つける。

彼は人のためでもなく自分のためでもなく、純粹に本能を動かした。

<死なせるか!!>

呼応するのはユニット1。

父の息のかかるこのユニット1は己の子を守り、力に変えさせる。  
全ては決した。

だからこそ父に感謝

だから己の血肉となれ。

翼を・・・

明日を・・・

希望を・・・

命運の類は静かに、それでいて本能のままに翼を広げた。

そして明日を望んだ。

静かに

プロムナード  
E N D

予告

半分の使類の撃退。

依然回復の見込みがないマリ。

封印命令の出るユニル

要塞「ビツク・ラント最深部95階層」

徐々に壊れるキョウスケの日常。

ユウの運命

ついに動き始める物語。

## 続く物語、参考：要望

まったくもって面白い。

クックックと異様に笑みをこぼすのは陶冶大学の名誉教授 要望。  
時、平成。

これが吉田 信二という男か・・・

吉田ははっきり言っておかしい人間に分類できると見ていい。

札付きのワルだとか、喧嘩っ早いとか・・・いろいろな噂がまるで  
空気のように

張り詰めている男。

哀しいかな彼は単純に喧嘩を売られただけだと証言する。

そんな彼に付き添う私はあるとき彼の友人に出会った。

「初めまして。鳥海 亮太です。」

鳥海 亮太と名乗る男はどこか落ち着きのある顔をしている。

握手をしたときもさわやかな青年と言う好印象を与えてくれる男。

「要教授の本は好きですよ？」

「嬉しいね」

亮太も信二同様研究者だという。

それからか・・・歳は離れているもののお互い機会が有ればすぐに  
良いように

研究を終え、飲みに行くのが日課となってしまうた。

亮太は中々見込みのある男・・・といったらあながち嘘となる。

彼はそこまで優秀ではない。

はっきり言って信二のほうが格段上を突っ切ってる。

しかし、信二とは対照的に亮太は社交的な面があるといえる。

しかし、16年前の事件はまさしく惨劇となった。

私は信二の紹介の元特殊組織 機関 副庁の座を渡された。

それほど重みではなかったが私は信二に一つの書類と同時に机をた  
たきつけた。

「なんですか？要さん」

書類にはどうやらアフリカのほうであるがそこには巨大な爆発の瞬間の写真が

印刷されていた。

「2ショット事件の真相はなんだ？」

私は隕石の衝突・・・と聞かされていた。

爆心地はもはやエグれていると言っても過言ではない状況。

しかし、怒りたい話は違う記事である。

一人の少年のことだった。

「・・・」

続く物語、参考：要望 その式

時、鄭和

さてはて我々の計画は誰が遂行するんだね？

鳥海 信二・・・

#

時、再び平和

・・・私はこの件について聞くまで帰らんぞ？

要さん・・・この件に関しては・・・

いや！そうは言わさん！！

この少年は一体なんだ？

・・・ついてきてください。

要塞 ビックラント 95階層

深いな・・・

ええ・・・

ビックラント ヘブンス・リミッター

これは？

我々が作ったものだ？

これは・・・まさか・・・

#

時、再び平成

マリ 使類の外見的排除

「ねえ・・・キヨウスケ君？」

「・・・」

本体内・・・千里とキヨウスケは椅子に座っていた。

しかし、キヨウスケの顔はもはや死人同様の様子。

「・・・」

「ねえ黙ってちゃ・・・」

「死んだんだ！！マリちゃんも死んだんだ！！！！！！！！！！」

いきなり・・・それはいきなり。

キョウスケは叫んだ。

それは 機関本部内でも大きく響いた。

それを聞きつけた一人のオペレーターはビクリと身を震わせた。

「やっぱり・・・伏せちゃったんだ」

#

「主電源展開」

「反応結果出します・・・使類です」

作戦指揮官 千里にってまさしく絶体絶命。

伏せきつたキョウスケ。

封印されたマリ。

出せるのはユウだけ・・・

### 3人の心の変化、飯島ユウ覚悟の中

運用カタパルトは起動。

「寄生型・・・」

まさしくゴーストタウン・・・

民間人、非戦闘員は全員ビック・ラント95階層への避難は完了している。

街はユウの搭乗するライジングユニサードだけ・・・

「使類か！！」

<これがマリの見たもの？>

そこには一人の人間。

しかし、ただの影のように見える。

実際マリはこの影の人間を撃破していた。

しかし影は使類の集合体。

影を攻撃すれば分裂により敵に寄生するというオチである。

しかし、徐々に形状を現す使類。

先刻までは”只の影”に過ぎなかったが、今は違う。

「マリ?!」

そこにはマリの肉体の一部を吸収した使類の姿があった。

真っ黒い肌をしているのは確かだが明らかにマリの姿が浮き出ている。た。

《うふふふ・・・》

ゾワリ・・・

ユウの体に突き刺さる一筋の声。

二種類の声が混じっているように聞こえるが一つは間違いなくマリの声である。

ケタケタと不気味に笑い続けるマリに変化した使類。

その体は徐々に日本人と同様の黄色人種の色に変わる。

最終的にはマリそのものとなってしまう。

ドクン・ドクン

さきほどまでは聞こえなかった鼓動が聞こえ始める。

#

同様の状況をキョウスケもモニター越しにチラチラと見続けていたが再び叫ぶ。

「マリちゃん!!!」

機関の人々がモニターからキョウスケに視線を向けたときには彼は出口へと向かい、外に出ようとしていた。

「キョウスケ君!？」

全ドアはロックされていると知りながらも一目散に外へ出ようと走り続ける。

ところどころに配置されているモニターのは依然進展がない。

#

無線越しに の面々とキョウスケが外に出て行ったことを聞いたユウはさらに困惑する。

<こいつは使類。使類、使類、使類・・・>

眼前に存在するのは使類だと何度も言い聞かせ、走行体制が変わる。ダッ!!

勢いよく地を蹴り上げ、腕を一気に使類の首元に持っていった。

#

勿論その状況はキョウスケの目にも入った。

「ユウ!!!何をしている!!!」

「いたぞ!!!」

最後の安全装置のドアをこじ開けている最中、向こう側から何名かの職員が走ってくる。

「うわ!!!何をするんだ!!!」

ただの少年に過ぎないキョウスケは大人の力にはまともに勝てず、二人がかりで取り押さえられた。

の本部に引きづられて行くときに彼は見ていた。

モーターを・・・



## 覚悟の瞳、その奥

「もう乗らない？」

「どういことだ…」

機関本部、司令部部長鳥海 信一の部屋。

その言葉は大きな部屋全部に広がった。

様々な覚悟があったのだろう。

ライジング ユニット1の専属コンバットマン キョウスケは覚悟をした瞳で

信二の前で言い放った。

その後は何も告げず、相手の答えも待たずに部屋から立ち去ろうと信二に背を向ける。

「あれは…」

「もういいんだ!!」

あれは使類だと事実を伝えようと口をあけるものの、やはり覚悟がらか…

走ること無く、早足しながら部屋を立ち去る。

「あ…あの」

ユウはキョウスケが出てくるのを見計らって話しかけた。

「…僕は…俺は簡単に人を殺すような奴と同じ空気を吸う気はない」  
これが彼の第一の変化とも言える。

一人称の違いや性格の面でも明らかに…

#

旧三重県 津市 久居 現昌氏 現在の稼働中の高速道路付近。

その下を小さな影が歩く。

制服を身にまとい、手には学生鞆。

「シャトル、出ますよ!!」

ここ昌氏から逃げる、という選択をした鳥海 キョウスケ。  
これもまた一つの運命かもしれない。

「シャトル緊急閉鎖、ならびに近くの避難所へ急降下します!!」

ETC / 一般

そう書かれたバーは緊急閉鎖。

ETCと一般の文字も全て「閉鎖」に切り替わってる。

「使類だ…」

電灯が真っ赤に染まった緊急シャトルの中で、その怪物を退治する  
すべを知っている少年は  
暗い顔で呟いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8603q/>

---

Rising

2011年4月24日22時59分発行